

大会。そして伊達佳内子が幼年の部全国優勝。丹羽峰子の少壮吟士全国決戦一回入賞、一般二部全国三位入賞。堤（奥村）由美が青年部全国優勝、少壮吟士拝命。六郷岳精会女子武道館合吟コンクール全国三位入賞等々。

また三代目会長遠田精心（八十八才）二代目会長遠田精敬（九十五才）が二年間に続けて逝去し、時代の移り変わりに先行きの不安を禁じ得ませんでした。しかしこれからは今までの教えをしっかりと守り、会員の皆さんと力を合わせて前進していくかなければならぬと固く思う次第です。

人間形成に不可欠な教えを説く詩吟をこれからも大切に伝えて行きたいと思います。詩吟とともに歩める幸せをかみしめ、命ある限り頑張っていく所存です。

千代田岳精会、成長続く 平成二十八年、三十周年大会へ



総本部常任顧問 磯田精信
千代田岳精会会长 鈴木精成

「吟魂燃ゆ」（平成六年発刊）には、『千代田岳精会』の「千」の字もない。誕生間もなくたせいだろうが、それから三十年近く当会は順調に成長を続け、平成二十八年には三十周年を迎える。

初代会長の飯田精鷹先生を中心にスタートした搖籃期から、家元・横山岳精先生、宗家・横山精真先生のご指導の下、ここまで辿ってきた道のりを振り返りながら、当会の歩みをご報告する。

明治生命の同好会がスタート

東京・千代田区丸の内に本社を置く『明治生命』（のち合併して、明治安田生命）に、詩吟の同好会ができたのは昭和五十九年。終戦後すぐ岳精家元と知り合い、岳精流統に参加していた飯田精鷹先生（平成二十七年現在の雅号）以下同）の呼びかけで、詩吟同好会として活動を開始した。このうち、飯田先生、岩崎精慶、林精吾、吉川龍鐘、大熊龍精、鈴木精成、磯田精信の創設時六人のサムライ達（吟士）は、今も吟を続けている。

練習日は週一回、みな現役社員だったので、昼休みと夕方の二回、明治生命本社七階の講堂に集まつた。そこが行事で使えないときには、地下駐車場を使つたこともある。

幸い、磯田が会社の営繕を担当する責任者だったので、練習場所にはさほど苦労しなかつた記憶がある。また、冷暖房も自由に使つた。社員の集まりであつたにせよ、わがままを許してくれた、明治生命の当時の幹部に感謝したい。また同好会として、年間五万円の補助もいただいた。この補助は、のちに岳精会となつても暫く続いた。

会社の経営にゆとりがある古き良き時代だったにせよ、ありがたいことだつた。その後平成十六年、日本最古の生命保険会社である明治生命と安田生命が合併し、



千代田20周年 岩崎精慶
吟道大会

今の『明治安田生命』となつたが、現在まで新宿にある旧安田生命本社の部屋を無料で貸していただいている。これまで、練習場探しの苦労をしないで済んだことは、会員増加にも大変プラスになつたと思う。

千代田支部誕生へ

同好会とはいへ、岳精家元（当時は宗家）のもと、きちんと詩吟を習つていた飯田先生の存在は大きく、当時私たちは「飯田塾」と呼んでいた。塾発足時のメンバーが、その後、吟友を誘い、会員が二十二名になつた発足一周年の昭和六十一年六月二十一日、労働会館で、第一回の温習会を開いた。

練習後のイッパイの席で、教場の名称をどうするかについて侃々諤々、「（本社がある）丸の内がいい」とか、「いや大きく千代田（江戸城が別名千代田城なので）としよう」とか、言い合つたのも懐かしい思い出だ。

そして昭和六十二年二月六日、晴れて岳精流日本吟院に加入、京浜合同教場の一分教場として「千代田教場」を名乗り、温習会に初参加する。この時だつたか、受付で「千代田って聞いたことがない、どこだ」と言われ、愕然としたことは忘れられない。

発奮した面々は、支部昇格の基準である会員五十名以上を目指し、競つて会員獲得に走つたものである。

明治生命の同好会を軸にした職域教場から、吟友の幅と数も広がり会員五十名を突破、晴れて昇格を申請、平成六年三月「千代田支部」となつた。八月には、岳精家元（当時宗家）の御臨席を仰ぎ、支部昇格大会を開くに至つた。



千代田支部 発足の会



千代田岳精会 発会記念大会

このときの支部には、千代田教場（のちに、丸の内第一＝井手教場長＝故人、丸の内第二＝岩崎教場長＝に分離）、東陽町（磯田教場長）の三教場があつた。

千代田岳精会発足

平成六年（一九九四年）「千代田支部発足大会」で挨拶された岳精家元は「二十一世紀には会昇格を目指せ」と檄を飛ばされた。平成八年、会昇格推進構想を作成、清水教場など新設。のちに述べるが、あの手この手の吟友獲得作戦を展開、平成九年（一九九八年）には会員数一〇六名となり、「千代田岳精会」への昇格を申請。平成九年九月、会員数は一三〇名となり、晴れて会への昇格が認許された。翌十年十月十一日「千代田岳精会」発足記念大会が、明治生命別館記念ホールで行われた。

支部発足から四年、家元の期待より、二年早いという快挙だった。

教場も順調に増えた。東陽町に統いて、平成八年に清水、九年に神田、ハザマ各教場が発足。その後、丸の内女子（現在は丸の内清流）、神田から枝分かれして新宿教場がスタートし、ほぼ現在の輪郭が整つた。

そして平成十八年十月二十九日、創立二十周年記念大会が明治安田生命ホールで開催された。会員二〇〇名近くに膨らんでいた。

いくつかの水源から流れ込む吟友

千代田岳精会の組織は、いくつかの水源から流出する水が集まつて大河になるがごとく、よこ糸とたて糸が紡がれたような重層的な形となつてゐる。

同社と取引関係にある清水建設中心の「清水教場」、同じく「ハザマ教場」。これに、明治生命が三菱グループ（金曜会）の主要構成会社である関係から、三菱グループ各社、たとえば「三菱化学」（三菱化成、三菱油化など）出身者も多い。こうした職域でのつながりが、会員を増やす強力な手立てになる。

学校の同窓会も、有力な「財源」となる。一例を挙げると、会設立当初からの指導者の一人・林精吾は、小学校の同級生、高校そして大学の同窓生を引き込んだ。同じく、「新宿プロック」のトップをつとめた酒井帆風（平成二十七年五月三十日逝去）は、大学の同期会に皆勤し仲間を増やした。彼は高校の同窓会で詩吟を披露し、数人を勧誘し一つの分室（今は新宿第三教場）を作った。

趣味の会にも源がある。山の会の同人たち、書道のグループからの参加者、麻雀仲間の誘い入れ等々。カラオケあるいはシャンソン仲間に「強い声を作る道場がある」と言つて、誘い込んだ仲間もいる。旅を共にして、夜イッパイの際での吟声を聴き、入会した人もいる。

地縁も大きい要素だ。たとえば「東陽町教場」は、磯田の後を受け耳塚昇風が二代目教場長に、そして三代目の菊地駿風とともに、市の広報を活用、無料講習会を開いて参加者を増やした。「神楽坂教場」「銀座教場」には、艶っぽい響きもある。

飲み仲間を吟友にするやり方もある。「丸の内プロック」の「丸の内支部教場」では、飲食店を経営する女性会員が、店内に家元、宗家の詩吟を流し、来店客に参加を勧めている。かなり効果的なようだ。

こうした吟友の輪の広げ方からなのか、女性が多い他の岳精会と違つて、男性が



2014年度
千代田温習会懇親会での余興

六割にも上るのが、千代田の特長だ。だから女性は大切に扱われ、辞める人が少ないとも言われている。

女子部でみると、平成三年の入会で会の女子部長を務める菅原龍琴・丸の内清流教場長、女子部副部長の太田龍翠（丸の内支部・草加）、花山龍桜（東陽町支部）、池田康風（神田）、橋本淳風（新宿）、廣田了風（桜ヶ丘）の皆さん、各地コンクールでの入賞実績のある実力者ぞろいである。

各大会への積極的参加

平成五年十一月の「京浜地区教場合同吟道大会」に二十六名参加したのを皮切りに、全国吟剣詩舞道大会、日本武道館での合吟コンクール、岳精流全国大会などにほとんど毎回のように参加し、いくつか上位入賞を実現している。

また、毎年開かれる全国吟詠コンクールの品川区連大会、同港区連大会などへも積極的に参加し、都連大会を経て一東日本一全国大会を目指す会員もいる。

温習会

昭和六十一年六月、労働会館に二十二名が参加、日ごろの研修の成果を披露する温習会を開いた。以降、千代田岳精会全体で開催、あるいは会場の都合で二グループに分けての会など、ほぼ毎年行われている。各教場が工夫をこらした企画構成吟を目玉にするなど、吟を楽しむ恒例行事になつてている。

吟の幅を広げる

千代田岳精会では、詩吟の練習に加えて吟の幅を広げる狙いで、各種の自立研修会がある。以下、簡単に説明したい。

- ・詩歌研修会 湊谷辰風氏をリーダーに月一回のペースで開催。漢詩への幅広い理解を進めている。

- ・演奏研修会 萩龍裕氏（のち西山定山氏が受け継ぐ）をリーダーに月一回、コンダクター研修を実施。

こうした研修会は、会としての団結を強める狙いがある。いずれも、平成十五年四月新設。

効果としては、各教場のカベを離れ、お互い顔見知りとなり、仲間意識を深めることに寄与している。

- その後も、次々と研修会が発足している。

- ・俳句自作自詠研修会 橋本隆山氏をリーダーに、月一回、自分で作った俳句を吟詠する。

- ・剣詩舞研修会 松尾宝山氏をリーダーに、千峰流宗家の金子千峰先生の指導で実施。各教場から、伴吟者を出している。

- ・月曜会 鈴木会長の発案でスタート。千代田岳精会幹部の養成を目的に、各教場から新人中心に四十名程度参加、鈴木会長の直接指導、副会長会が運営にあたる。

- ・千吟会（千代田の「千」をとり命名）鈴木会長の主導で、平素、教室で学べない律詩、新体詩などを中心に研修している。

組織の形を整える

会の拡大に合わせて、組織的な運営が必要となるので、以下のようないくつかの部門を新設。

- ・許証、総務、経理部門（平成十七年一月）。引き続き、事業、広報、吟楽、女子部が設けられた。吟楽部門は石田勝山氏をリーダーに、隨時近郊で一泊又は日帰りの吟の小旅行を実施。広報部門は、八田仁風リーダーのもと、年三回広報誌「ちよだ」を発行、会員に配布している。

- ・業務推進委員会 山口隆風委員長のもと、各教場長中心に月一回、千代田岳精会の運営、催事等あれこれ話し合っている。

- この委員会は、総会の位置づけとされる決定機関「千代田岳精会幹事会」への原案提示の役割を担うとともに、千代田の「吟友の輪」活動の推進機関として、山口委員長を中心に、会員増大に大きな役割を果たしている。

二代目会長に鈴木精成が就任

- 「千代田岳精会」がスタートして二十年目の平成十九年、飯田初代会長のあとを受け鈴木精成（当時龍成）が二代目会長に就任する。これまでに飯田会長はじめ設立メンバーを中心とする働きで、会員数は二〇〇名に上っていた。

当時、会設立に力を注いだ幹部は年齢も八十歳前後と高齢化していたため、当初からの会員で六十代と一番若く、かつ最適任とみなされた鈴木に白羽の矢が立ち、全員異議なしで決まった。憲議にも似た交代劇だった。これを機に先輩各位も、磯田会長代行、岩崎副会長、吉川監査担当が退任し、林・神田教場長、村上龍道・清水教場長（当時）らも順次後輩に道を譲り、若返りを図った。ただし「老兵」といえども死せず、先輩各位も常任顧問や顧問など、それぞれ役割を分担し、会員の指導と後継執行部への助言等、いまでも活動を続けていることは、誇ってよいことであ



2015年3月
千代田幹事会

（中央が鈴木会長）

るう。

新しい千代田岳精会の体制は、鈴木会長を支える副会長として、大熊龍清、耳塚昇風（当時）の二名が任命され、教場長についても、平成二十一年の神田・池田康風をはじめとして、丸之内第二・山口隆風、東陽町・菊地駿風、清水・徳本順風、ハザマ・城戸稻風の各氏が新たに就任し、新体制への進行を進めた。

新体制のもと、千代田岳精会の拡充は順調に歩を進めており、横山精真宗家が、本部幹事会席上「千代田三十周年には三〇〇名達成を」と激励いただいたことだが、平成二十七年現在三百一十一名と繰り上げ達成している。

新生「千代田」の歩み

平成十八年に流統本部が打ち出した「吟友の輪拡大二ヶ年計画」は、「千代田早期二〇〇名達成」の好機となつた。平成十八年五月の東陽町教場銀座分室（現銀座教場）開設を皮切りに、平成十九年四月には東陽町教場神楽坂分室（現神楽坂教場）。五月には新宿教場金曜分室（現新宿第二教場）、六月には丸之内第二教場日暮里分室（現日暮里教場）、そして九月に神田教場用賀分室（現用賀教場）と相次いで拠点の新設に成功し、それぞれの拠点所属の会員を含み、「平成十九年十月会員二〇〇名達成」の計画を実現し、十月開催の「温習会」も大盛会のうちに行われた。

千代田の強みは、活気ある教場づくりのために「会員拡大」こそ必須であるという既存会員各位の信念であり、そのために流統本部方針に逸早く取り組む積極姿勢にあるのではないかと思われる。

平成二十年の本部計画「組織の輪拡大二ヶ年計画」にも会を挙げて積極的取り組



千代田温習会合吟風景



2015年3月
千代田岳精会幹事会

みが行われ、志茂、代々木、松戸（現我孫子）、調布の各分室（現教場）が開設された。次いで平成二十一年には、鎌倉、平成二十二年には中野、逗葉、市川そして桜ヶ丘の各分室（現教場）が開設された。

その後の拠点開設も順調に進められ、平成二十三年以降、熊谷、新宿第三、新陵、井田の各分室（現教場）が開設されている。

この拠点設置推進を牽引してきたのは、それぞれの地域に密着している方が積極的に「手を挙げ」、会員拡大に行動していただいた結果である。

平成二十四年、本部の「無料講習会」推進方針に基づき、当会でも教場単位による「講習会」を企画、開催した。そのために、山口隆風副会長を中心にプロジェクトチームを編成し、先輩支部からアドバイスをいただき準備も怠らなかつた。

皮切りの東陽町教場神楽坂分室（現教場）での「無料講習会」の成果（見学者三人、入会者六人）が大きな励みになつて、以後、新宿、丸之内第二鎌倉、丸の内第二桜ヶ丘、東陽町調布、丸之内第二日暮里の各分室（現教場）が開催し、成果とともに、貴重な経験を積むことができた。この経験を生かして「千代田の無料講習会」を今後ともいろいろな形式で実施していくことにしている。

千代田岳精会には、先述した会員横断の自主研修会が活発な活動を展開しているが、これとは別に、年間計画に基づく「階層別研修会」（初級層、有伝者）が研修部門主催の「宗家漢詩公開講座」（無料）を開き、超満員の聴衆が集まつた（詳細は、別稿で紹介する）。

催で積極的に行われ、その参加者も年毎に増加しており、会活動の活性化の大きな要素となっている。まさに「研修の千代田」と自負している次第である。

千代田のこれから、「組織の千代田」を一層推進へ、四プロック制で

草創期から今日まで、千代田岳精会は一歩一歩の前進を果たしてきた。その芯として重きをおくことは、「人を活かす」「組織を動かす」の二点である。

平成二十六年から新しい執行部体制として副会長七人（山口隆風、菅原龍琴、菊地駿風、酒井帆風、徳本順風、太田龍翠、花山龍桜）、会長補佐五人（前田道風、八田仁風、萩原晴風、池田康風、橋本淳風）が会長を補佐し、会を牽引する役割を担っている。（酒井氏は二十七年五月逝去）

会員数三〇〇名に達した平成二十六年スタートに当たり、会の構成を四つのブロックに編成、四人の副会長がブロック長を兼務する体制とした。

平成二十七年現在の構成は次の通り。



千代田岳精会を支える副会長
の皆さん
左から太田、徳本、菊地、山
口（筆頭）、菅原、花山の各氏

「丸の内ブロック」（ブロック長・山口隆風 丸の内支部、草加、日暮里、鎌倉、桜ヶ丘、丸の内清流の各教場）

「東陽町ブロック」（ブロック長・菊地駿風 東陽町支部、銀座、神楽坂、調布、熊谷、鎌ヶ谷、市川の各教場）

「中央ブロック」（ブロック長・徳本順風 ハザマ支部、我孫子、新陵、生田、清水、中野、逗葉、神田、用賀、志茂の各教場）

「新宿ブロック」（ブロック長・出水田鶴山 新宿第一、新宿第二、新宿第三の各教場）



千代田岳精会会長補佐の皆さん
左から橋本、八田、前田（主幹）、
池田、萩原の各氏

井田岳精会の経過と歩み

井田岳精会会長 大森 精翠

初代会長朝倉精照先生が平成十二年六月二十七日、七十四歳でご逝去され、二周年大会後、二代目会長松倉龍慧先生も岳精流を退会されました。平成十三年一月